

## 日本におけるヴァイニンガー受容

―芥川龍之介・谷崎潤一郎作品を中心に―

西野厚志

### 一、オットー・ヴァイニンガーについて

そのとき、詩人は「やられた！」と叫びたという。

詩集『感傷の春』（一九一八）やハイネの翻訳で知られる生田春月は、石川三四郎らとの親交の中で無政府主義的傾向を露わにしつつも次第に虚無主義にとらわれていったが、芥川龍之介自裁の報に接した際、そう洩した面持ちには沈思感慨深きものがあつたと伝えられている（『生田春月全集』年譜）。

一九二九年七月二日の日付を持つ「海との結婚」には、次のようにある。

詩人はさまざまの死を考えてゐた。彼は死ぬ事も詩を書く事と心得てゐるのだ。して、彼が最も好きなのは、シエリイの死であつ

た。クライストやワイニンゲルの死のためには必要な武器が欠けてゐたし、ネルヴルや有島武郎の死は、まづ避けたかつたし、芥川龍之介の死も、かなり面倒な手続きが要つた……すると、彼女は水をえらばうと云つた。それが偶然彼と一致した。

この文章が綴られて一年も経たない一九三〇年五月一九日、詩人は遂に瀬戸内海へと身を投じて、三八歳の一生に自ら終止符を打つ。芥川に先を越された彼は、自死を遂げた者たちの列の中に、その名「ワイニンゲル」を置いたのであつた。おそらく、その後自身の名が連なることを予感しながら。

不穏な名「Otto Weininger（オットー・ワイニンゲル／オットー・ヴァイニンガー）」、これは、ベートーベン終焉の部屋で、一発の銃声とともに二三年の生涯を自ら閉じた特異な思想家のものである（春月

の「ワイニンゲルの死のためには必要な武器が欠けてゐた」とはこれを指して言う)。一八八〇年、彼はハンガリー系ユダヤ人としてウィーンに生まれる。幼少期より複数の言語に習熟しつつ多分野の学識を得てウィーン大学に進学後、学位論文を提出と同時にプロテスタントへ改宗、一九〇三年に一冊の書物を世に問うも、直後、唐突に自ら命を絶つたのであつた。

生前刊行された唯一にしてその主著『Geschlecht und Charakter (性と性格)』は、プラトン及びカントの思想を基盤に、極端まで推し進めた二元論を特徴としている。〈理念／現象〉、〈叡智界／感性界〉といった二項対立により世界は把握され、それが形而上学的には〈精神／物質〉、倫理的には〈善／悪〉、宗教的には〈キリスト教／ユダヤ教〉の対立として様々に変奏される。世界とは、両者による呵責のない闘争の場なのだ。

対立は人間生活において〈男性／女性〉という二極への分裂として現れる。そのうち、女性は〈母婦型〉(生殖)と〈娼婦型〉(性欲)という二つの典型としてのみ認められ、価値的には〈無〉だと宣告されるのであつた。だが、この極端な反ユダヤ・女性蔑視の思想がそれでも興味深いのは、二項間の対立は飽くまで抽象的な理念としての典型に当てはまるだけで、現実には純粹な男(M)や女(W)は存在しないとする点だ。全ての人間は両性の性質を併せ持つ(M+W)。男女の違いとはその比率の程度に過ぎない。つまり、性的差異が相対的な差異に縮減されているのである。にもかかわらず、いや、だからこ

そ、男性は自身の持つ女性的な属性の一切を排除して純潔を守ること、自己の神性を〈天才〉にまで高めることが出来るとされる。しかし、現代は徐々に女性化しユダヤ化の傾向にあるというのが著者の診断だ。

同書は著者の死とともに注目を浴びることとなる。フロイトをヒステリー研究から無意識の発見へと導いたような、そして、クリムトが視覚的表現を与えたような、世紀末ウィーンの雰囲気濃密に反映したその思想は後に、かのヴィトゲンシュタインをも魅了する一方で、反ユダヤ的色彩ゆえにナチスにも利用された。こうして、その名は呪われたものとなつたのである(レイ・モンク著／岡田雅勝訳『ウィトゲンシュタイン 天才の責務』みすず書房、一九九四)。しかし、高まる反響は独語圏にとどまらず、欧米諸国やその植民地の言語へと翻訳されていく。そして、後に詳しく見るように、その波は出版から時を置かずしてすぐさま日本にも及んだのであつた。

芥川龍之介も、死の間際、この不吉な名に言及している。

問 君の交友の多少は如何？

答 予の交友は古今東西に亘り、三百人を下らざるべし。その著名なるものを挙げれば、クライスト、マイレンデル、ワイニンゲル、……

問 君の交友は自殺者のみなりや？

答 必ずしもしかりとせず。自殺を弁護せるモンテニユのごときは予が畏友の一人なり。ただ予は自殺せざりし厭世主義者、

——シヨオペンハウエルの輩とは交際せず。

〔河童〕『改造』一九二七・三二

「クライスト、マイレンデル、ワイニンゲル、……」、これを発表して半年足らずで、芥川は自ら命を絶つて、自身もこの列に並ぶこととなった。「そして芥川君の亡くなった七月二四日と云ふ日は、また私の誕生日なのである」〔芥川君と私〕『改造』一九二七・九。奇しくも始まりと終わりの日付を芥川と分有する谷崎潤一郎も、ほぼ同時期、同じ『改造』誌上でその名に触れていた。

彼は又「実体」の哲学を持ち出して、プラトンのワイニンゲルだのとむづかしい名前を並べ始めたが、私はそんなくどくどしい理屈を覚えてもゐないし、一々書き留める根気もない。

〔青塚氏の話〕『改造』一九二六・八―一二

このあと谷崎は小説の筋を巡って芥川と論争を演じることになるが、それと前後して二人のあいだには、「ワイニンゲル」という名を介したささやかなやりとりがあったとでも言えるだろうか。だが、両者は同じ著作を読みながらも全く正反対の読解可能性を示している。

ヴァイニンガーと日本文学との関わりについて、先行研究としては石割透による芥川作品読解を中心にした指摘があり、慈愛に満ちた無垢な存在としてのみ見る女性観と、その表裏にある倫理性の欠

如した性的な存在としてのみ見るペシミスティックなそれとの緊張に影響関係が看取されている（〔芥川〕と呼ばれた芸術家』有精堂、一九九二）。それを受けた篠崎美生子は、女性という政治的に代表し得ない他者を美学的な表象に昇華する芥川の態度、すなわちミソジニー（女性嫌悪）を別抉して、それがヴァイニンガーの思想と同時代、さらには「実の「母」に温かくはぐくまれる経験を持たないまま、「娼婦」的な女に脅かされた「芥川」像に感情移入しつつ語る「芥川研究の言説に通底することを指摘した（〔ジェンダー―「芥川」と「芥川研究」を問い直す鍵〕『解釈と鑑賞』別冊「芥川龍之介とその知的空間」二〇〇四・二）。同様に、生方智子も夏目漱石や森鴎外作品分析から、新たな表現獲得へと向かう〈青年〉たちの欲望を析出、既成秩序を転覆する潜勢力をそこに認めながらも女性を言語以前の未分化な領域に閉じ込めるジェンダー規制を、ヴァイニンガーに典型的な時代の枠組みだとしている（〔表象する青年たち―『三四郎』『青年』―』『日本近代文学』第七一号、二〇〇四・一〇）。

しかし、おおむね批判的な文脈で触れられてきたその名も、谷崎作品との関わりでは様相を異にする。千葉俊二が異性装を好む登場人物や生物学的な性差を攪乱させる発想を論じて、性的な境界に揺らぎを持ちこませた者こそヴァイニンガーだとするように、留保付きながらも肯定的に論じられるのである（〔解説 転換する性〕『潤一郎ラビリス一四』中公文庫、一九九九）。同様に最近では、鈴木登美が社会的・文化的に画定された性的同一性に対する疑念の源泉としてロンブロー

ゾクラフトIIエビングとともにその名を挙げている(『ジェンダー越境の魅惑とマゾヒズム美学』谷崎潤一郎 境界を越えて』笠間書院、二〇〇九)。

以上の両極端なヴァイニング評が相互に参照された形跡はない。要因は、日本におけるその受容が詳細には明らかにされてこなかったことにあるのではないか。そこで、本稿では、『性と性格』という一冊の書物がどのように読まれ、他の書物とどのような関係を取り結んだのかという見取り図を素描する。そして二極化しているヴァイニング評価を、先行研究同様、それぞれ芥川と谷崎に代表させながらも時代に開いていくことで、一見して作家の特性と思われる傾向が実は広く共有されていたことを示し、それぞれの作品、とりわけ谷崎のテクストを分析するための予備的考察としたい。

## 二、日本におけるヴァイニング受容

著者の末路ゆえ、あるいは、その著作の内容ゆえにだろうか。不安定な自己形成期、ヴァイニングに魅せられた者は多い。「今、オット・ワイニングルの『性と性格』を読んでいます。大へん面白いものです」と手紙を綴るのは一六才の三島由紀夫である(東文彦宛、一九四一・一二・二九)。また、本田秋五は、植谷雄高の思想遍歴について「彼の中学時代の生活をたどつてみると、ほぼ私の高等学校時代の生活に対応する」と言い、自分が「ゴンチャロフの代りにトルスト

イを、ロンプオーゾオでなくてワイニングルを読んだのも高校時代であつた」と述べる(『戦後文学の作家と作品』冬樹社、一九七二)。

芥川もまた、「大道寺信輔の半生」(『中央公論』一九二五・二)の未定稿「厭世主義」で、学生時代について次のように回想している。

彼も亦あらゆる青年のやうにいつか哲学に溺愛してゐた。殊に二三の哲学者は彼には神々も同じことだつた。(…)又或る友人の蔵書を借りたワイニングルを写す為に学校を休んだことを覚えてゐる。けれどもそれは求道心の外にも感傷主義や術学癖や独逸語に対する尊敬(?! )を交へた或精神的流行病だつた。

一方、谷崎はといえば、遅くとも二〇代半ば頃までには「男女と天才」を読んで、ワイニングルの所説を聴いて「いたようだ(捨てるる迄)『中央公論』一九一四・二)。情報源は後に「天才論 ワイニングルの天才論」(『科学ペン』一九三八・九)を書くなど、終生その思想に関心をよせていたと思しき杉田直樹であろう。二人は一高時代ともに「校友会雑誌」文芸部委員を務め、また、第二次『新思潮』第二号(一九一〇・一〇)には、谷崎の戯曲「象」とともに、杉田による「生理学上より見たるオットウ・ワイニングル」が並んでいる。その交友のなかで谷崎は、具体的な内容を早くから聞き及んでいたものと推測される(千葉「解説 転換する性」前出)。

その思想に魅せられた一人であつた宇野浩二は、自伝的作品「青春

期」(『新生』一九四六・二〜七)で青年期を振り返って、「もつとも熱心に読んだのは、オットオ・ワインゲルの『性と性格』の英訳本」だったと回想する。よほど強い感銘を受けたと見え、一九一五年ごろ静岡県は三保の松原に広津和郎と遊んだ折、「ワインゲルを読むことを勧め」、英訳本を貸し与えたという(広津「年月のあしおと」『群像』一九六一・一〜六三・四)。宇野は、英訳本以前にまず「この本に興味をひかれたのは、中学の三年生ごろであるから、十五六歳のじぶん」(宇野は一八九一年生まれ)だとして、次のように述懐している。

『男女と天才』といふ題の本で、表紙と背の上に、GESCHLECHT UND GENIEと書いてある。(…)この本は、片山正雄(孤村)の著で、(…)ワインゲルの『性と性格』の梗概ではあるが、「至れり盡せり」の梗概である。

ヴァイニングガーの思想を初めて本格的に日本へ紹介したのが、この片山正雄訳による『男女と天才』(大日本図書、一九〇六)である。片山自身「一年有半前、偶然の事よりして、オットー・ワインゲルの『性及び性格』を手にすることを得、一読して其奇抜の議論に驚き、「唯物的一元論者は変じて、二元論者とな」ったのだという(『靈魂と国家』『帝国文学』一九〇六・二)。その片山によって『男女と天才』と改めて題された同書は、谷本梨庵の「序言」、登張竹風の「はしがき」、東郷青楓「序」、片山自身による「自序」と原著者の生涯とその

思想を素描した「オットー・ワインゲルの伝記及び学説に就て」を付した抄訳であった。著者の注記によるとこの他にも河上肇と阿部秀助にも序文執筆の約束を取り付けていたようだ。後に『男女と性格』(人文会、一九二五)と改題のうえ再刊された際の訳者「はしがき」によると、最初の「訳書は一年ならずして版を重ねること七回に及び、当時の思想界及文壇に多少の印象を与へ」たのだという。

同書に対しては、刊行前に稿本の段階で目を通した登張竹風が「女性性欲の塊物なれば、性欲を断離せざる女は、男と均しかるべき望はなし」とその思想の内実に触れながら紹介したのははじめ(片山孤村が「男女と天才」に題す)『読売新聞』一九〇五・一一二・四、後に同書の「はしがき」として収録)、「友人が片山孤村氏訳オットー・ワインゲルの『男女と天才』を送つて呉れたので、何心なく開いて読んで見た」という森田草平が「近頃自分は斯く迄自己を空しくして他人の書いた物に傾倒し得たためしがない」と激賞、「自分の書かうと思つたやうな事が皆書いてある」と自身計画していた「女性論」を放棄せざるを得なくなった経緯を記した(『個人的興味』『読売新聞』一九二二・二・一八)。また、黒岩涙香が「独逸の学者オット、ワインゲルの説を紹介しつゝ、著者自らの婦人貞操観を述べ、その「根本思想は『貞女は一夫にだも見えず』と云ふ單元」だという認識から「日本に誰か生涯を独身で暮した婦人は有るまいかと詮索し終に此小野小町論を草するに立ち至つた」という『小野小町論』(朝報社、一九一三)に先立ち、「婦人覚醒の第一歩」(『淑女か、み

一九二二・四〇八)で『男女と天才』と題する其の貞操論』として言及するなど、やはり片山訳が参照されており、一定程度の反響のあったことがうかがえる(先に引いた「捨てられる迄」の「男女と天才」を読んで」という一節から、谷崎も片山訳を読んでいたことがわかる)。当時の文学作品・思想書のうち、現在でも著名な書物からヴァイニンガーについて触れた部分を挙げよう。

「(…)君、オトリシアンで、まだ若いのに自殺した学者があつたね。Otto Weingerといふのだ。僕なんぞはニイチエから後の書物では、あの人の書いたものに一番ひどく動されたと云つても好いが、あれがかう云ふ議論をしてゐますね。どの男でも幾分か女の要素を持つてゐるやうに、どの女でも幾分か男の要素を持つてゐる。個人は皆M+Wだといふのさ。そして女のえらいのはMの比例数が大きいのださうだ。」

(森鷗外「青年」『スバル』一九一〇・三―一九一一・八)

男女相合して一家族を成すの目的は、単に子孫を遺すといふよりも、一層深遠なる精神的(道徳的)目的をもつて居る。プラトールの「シンポジウム」の中に、元は男女が一体であつたのが、神に由つて分割されたので、今に及んで男女が相慕ふのであるといふ話がある。これは余程面白い考である。人類といふ典型より見たならば、個人的男女は完全なる人でない、男女を合した者が完

全なる一人である。オットー・ヴァイニングルが人間は肉体に於ても男性的要素と女性的要素との結合より成つた者である、両性の相愛するのはこの二つの要素が合して完全なる人間となる為であるといつて居る。(西田幾多郎『善の研究』弘道館、一九二二)

ちょうどこの頃、日本橋の丸善洋書部が火災に見舞われ、一万冊余りを灰燼に帰す事件が発生している(一九一〇年二月一日)。そこには、現在でもよく目にする著者達と同じように書棚に並ぶその名を見つけることが出来るだろう。「四壁の書架は尽く焼燼して一片紙の残るものだけに無かつた。日本の思想界を賑わしたトルストイもニーチェもワイニングルもストリンデルベルグもハウプトマンもアンドレーフもアナトール・フランスも皆跡もなく猛火の餌食となつて了つた」(内田魯庵「灰燼十万巻(丸善炎上の記)」『趣味』一九一〇・二)。「[Weinger]と綴る鷗外、あるいは「ヴァイニングル」と表記する西田はおそらく原書でヴァイニンガーを読んだに違いないが、その名の普及に片山訳『男女と天才』が一定以上の役割を果たしたことは疑いえない。

赤木桁平は『性と性格』のアフォーリズム風の抜粋からなる「ワイニングル語録」を一九一四年七月『アララギ』に掲載、翌年同誌に「オットー、ワイニングルとその哲学」(三、四、七)を三回にわたつて発表、片山訳をはじめとして、「青年」の一節と、『白樺』での紹介(該当記事なし)、あとその他一つの感想文(不明)をその頃見かけたと言うが、

他にも杉田直樹「生理学上より見たるオットウ・ワイニンゲル」(第

二次『新思潮』一九一〇・一〇)が書かれたというのは先述のとおりである。

さらには、彼を讃える詩まで現われた。

ああわがきよきオットワイニンゲルよ、

をさなきわが念頭にふかくきざみこまれて、

終生けしがたき記念となれる君よ、

(…)

ああかの無意識のうちに限りなく繁殖するものよ、

彼等はその断片に於て汚るるごとく見ゆ、

されどわがきよきオットワイニンゲルよ、

彼等はやがて新しき生命とよろこびに生きかへり、

盛んなる意識の火に燃ゆるを見よ。

生殖の打勝つべからざる羞悪の念、

童貞と独身の洩らすべからざる驕慢の心、

われはそのいづれを慕ふべきかをみづから知り、

されどかの生命に反抗するものの寂寥と、

生命を信じてそれを愛するものよろこびを思ふ時、

われはいまそのいづれの道を選ぶべきかに迷ふ。

(…)

(佐藤清「オット・ワイニンゲルに與ふる」『六合雜誌』一九一四・三)

また、前出の赤木「オットー、ワイニンゲルとその哲学」によれば、文壇・論壇外でも「この頃では彼の名も変態心理学の講義などにかの有名なニイチエや、「購出の哲学」Die Philosophie der Erlösungといふ変な書物を書いて自殺したマインレンデル Mainländer (この人はワイニンゲルと一緒に研究すると興味の多い人である) など、いふ連中と一緒に必ず引合に出されるほど有名になつて来た」と言い、小規模ながら「ヴァイニンガー現象」とでも呼べるような流行の様相を呈していたようだ。

この他、大正から昭和にかけて、例えば、徳田秋声のような自然主義の作家が「ワイニンゲルと云ふ哲学者の書いたもの」として、「人間には完全な女性もなく、完全な男性も鮮ない。男性にも女性の分子があり、女性にも男性の分子がある」と紹介をし、「女性描写が男性作家にもでき、男性描写が女性にもできるのは、性の混交があるからだといふやうな気もする」(『男と女』『女性日本人』一九二一・一一)と述べている。また、後にも秋声は「本質的には完全な男性がないと同じに完全な女性も幾んど有りえない。少しづつ、交錯し混交してゐると言つていゝ、これはワイニンゲルを待たなくとも、我々日常の体験から来る常識」(「この頃の事(二)」『時事新報』一九二八・三・二六)と繰り返し名を挙げた。

また、白樺派の作家たち、例えば、有島武郎が「ワイニンゲルのいひ出した婦人の二種の典型、即ち家婦型と娼婦型」(『石にひしがれた

雑草』『太陽』一九一八・四)と、さらに里見敦が「男と云ふものは、量の多少こそあれ、必ず幾分の女が加味されてゐるし、女にはまた、必ず幾分の男が含まれてゐる。さうしてその分量の具合で、いろいろの性質が分かれて来る。——と云ふ風に説いたオットー・ワインゲル」(『文藝管見』『改造』一九二二・一〇)と、あるいは、武者小路実篤が「ワインゲルが書いてゐた」(『母と子』『朝日新聞』一九二九・二二・八・九)とそれぞれがその名を書き留めている。

先述のように、同書は片山訳が「性哲学不朽の名著出づ!!!」(『朝日新聞』一九二五・六・二三)と銘打たれて『男女と性格』(人文会、『男女と天才』と同内容)として再刊、さらに同年、「両性問題の研究に對する革命的な世界的名著!!!」(『朝日』同・九・三〇)と喧伝された村上啓夫訳『性と性格』(アルス、後に『世界第思想全集』(春秋社、一九三四)収録)が刊行されるに到り、遂に全訳がなつた。その状況も手伝つてか、中原中也が日記に「ワインゲル『性と性格』読了」(一九三六・一・二五)と記し、中島敦が「狼疾記」(一九四二・一一)に「ワインゲルによれば、女は、一生の間に自分に向かつて言われた賛辞をことごとく覚えてゐるものだそうだ」と書くなど、その名を散見することが出来る。

それぞれの時代にそれぞれの流行現象があつた。明治期のスペインサーやニーチエ、大正期のトルストイやカント、昭和前期のドストエフスキーやシエストフ。そこまでの規模とは言わないまでも、以上のようにヴァイニングの著作は読み継がれ、その名と思想は散種され

ていたのである。

### 三、ヴァイニングの二つの読み方

一九二二年の暮れ、ベルグソンの紹介者として知られた批評家、野村隈畔が情死した。この死を巡つて『読売新聞』紙上において、西宮藤朝と一読者とのあいだで小さな論争が起こる。論点は、西宮「或る思想家の自殺」(二二・七、八、九)が述べた思想と実生活の非関連性についてである。「哀湍生」と名乗る読者は反論する。

思想家が其思想に依つて自殺をすることがないといふ御説は少し独断ではありませんまいか。オット・ワインゲルは自分の哲学系統の矛盾に依つて自殺したとなつてをります。オット・ワインゲルの自殺については別に他の説でもありませんか。

(『西宮氏に伺ひます』『読売新聞』一九二二・一二・二三)

「哀湍氏に」(同・五)、「思想家の自殺」再び西宮氏に」(同・一五)と応酬が続くも論争はささやかで、すぐに立ち消えとなつた。(思想)とは死に至る病の謂いなのか、ここで決着は付かなかつたが、確かにヴァイニングのそれには致命的な何かがある。

その思想に憑かれた数ある者のなかで、最も悲劇的な結末を迎えたのは、阿部次郎批判で華々しく論壇に出ながらも夭逝した、片上伸(天



弦)の末弟、竹内仁(一八九八〜一九二二)の場合であろう。

竹内は「二歳のワイニンゲルによつて書かれたこの書を偶然にも同じく二歳の時に読んで強い感動を受けた」という(二元論哲学の殉教者―オットオ・ワイニンゲルのために―)『竹内仁遺稿』イデア書院、一九二八、以下同)。彼の日記や書簡では繰り返しその思想の重要性が強調されている。曰く「女性観に於ては自分は殆ど全くWeingerに従ふ様になつてゐる」(一九二二・八・二五)、または、「Weingerの言説に多くの誇張と妄断との弊有ることは明かであるにしても、その中にまた尊い真理の閃光を見出すことは困難でない」(九・一二)、さらに、「倉田氏やトルストイのそれよりはまだ(ワイニンゲルのそれの方に哲学的倫理的の深さと、美学的の悲壮美とが比較にもならぬ程にたたへられてある」(有澤廣巳宛、九・二九)、あるいは、「Weingerの思想は、全体として、よし誤謬であつたにしても、それは人類の思索力の到達したる最も深き美しき誤謬である。(…) Weingerの Geschlecht und Charakter (…) 全ての人がこの書の生命となれる問題を少なくとも一度は、自らの問題とすべきであり、それがためにはこの書の思想を理解することが極めて多くの暗示と視点とを與へるものである」(二・三〇)等々、その傾倒ぶりには尋常ならざるものがあつた。

だが、二四才の誕生日を目前にして「ゲシュレヒト・ウント・カラクテル」をワイニンゲルが書いたのは二三(西洋風の数へ方)の時ださうですが、何だかこちらも少しやらなくてはならぬ様な気がします。

ます」(青柳秀夫宛、一九二〇・二・二七)としたためた青年が結果的に成し遂げた事といえば、許嫁の両親を殺害した後に自らも縊れて果てるという「あわれな死」(中野重治が「むらぎも」で竹内とおぼしき若者の死に用いた語)に過ぎなかつたのである。

ところで、竹内がその批判によつて世に出ることとなつた阿部次郎に、次のような文章がある。これは、前出の赤木桁平のヴァイニンガー論と並んで掲載されたものである。

男を女に生れ替らして見たり、女を男に替らして見たりして、個性の動き方が男女によつてどんなに違ひ、どんなに一致するかを見るのは興味のある「Experiment」であらう。俺を女にしたり、××を男にしたりしたらどんなものが出来るかしら。

(「思想と生活の断片(去年の日記から)」『アララギ』一九一五・四)

芥川の死と同様、人格主義を巡つて「大正期と昭和期との実質上の転換」(小田切秀雄「解説」『現代文藝評論集(二)』筑摩書房、一九五八)を演じた竹内と阿部の二人。それぞれの性に対する認識にはヴァイニンガーの異なる二つの読解の方向性が示されている。

どういうことか。

ヴァイニンガーの思想には矛盾がある。つまり、純粹な(男(M)／女(W))を対立させて性的差異を乗り越え不可能とする(性差の絶対化(固定化))と、男女の違いは(M+W)の比率によるグラデー

ションに過ぎないとする(性差の相対化(多様化))という二つの方  
向性である。そのどちらを強調するかによって、論者の立場は決定さ  
れてくるのだ。

当然のことながら、(性差の絶対化)は、恣意的な属性を本質化し  
て自明視する女性嫌悪として現われるだろう。例えば、「所謂「新し  
い女」よりも「古い女」が好き」だという佐藤春夫が、平塚雷鳥の  
態度をいかにも「女性的」だとして批判、「この「女性的」といふ  
のはオットウ・ワイニンゲルに依る」という場合(WOMAN, ALL-  
TOO-WOMAN 平塚明子論「中央公論」一九一四・七)がそうである。  
あるいは、与謝野晶子が「ワイニンゲルが「女は我子に対しては母で  
あるが、他人の子に対しては全く継母である」という意味の事をいつ  
ている通り」とその思想を肯い、同時に、「サンボワン婦人」(『我等』  
掲載高村光太郎訳「未来派婦人の婦人論」(一九一四・三)と「未来派  
婦人の楽欲論」(同・三)がある)の「婦人自ら内にある女性を絶滅  
せねばならぬ」という意見を「自分の最大欠点を暴露してそれを絶滅  
しようとする誠意と勇氣」だと積極的に評価する場合(「婦人改造と  
高等教育」『毎日新聞』一九一六・一・二)などがそれにあたる。  
そのようななか、和辻哲郎「童貞聖母」(『女性改造』一九二四・二)は、  
ひとつの典型をなしている。その「付記」によれば、同論は一九二三  
年八月三十一日、すなわち関東大震災の前日に脱稿、焼失したかに思わ  
れたが奇跡的に火災を免れたのだという。事後に再読した自らの感想  
を和辻は「付記」に綴っている。「地震後数日の間、死の脅威によつ

て生活が緊張してゐた時、我々が女性に於て認めたものは母性と処女  
性との昂揚であつた。肉欲の原理としての女性はい時その姿をかくし  
た。わたくしはこの印象から、最後の数行をもつと詳細に書くべきで  
あつたと思ふのである」。

その「最後の数行」が、これだ。

童貞聖母は女といふ概念から処女性と母性とを抽出して作つた女  
の一種型なのではない。それは女以上のものである。人類を永遠  
に引き行くところのイデーの象徴である。ファウストの結句に云  
ふところの、我々を引き行く「永遠に女性なるもの」とはまさに  
これであらう。(…)この象徴のために用ゐられたものが、女の  
諸性質のうちの母性と処女性とであることは、女が何に於て価値  
を持つかを最も雄弁に語つたものと見られよう。女性の前に掲げ  
らるべき理想は、この価値のうちに求めらるべきである。中世人  
の見たヴィナスを理想とする如き女たちに対しては、奇才オツ  
トー・ワイニンゲルの言葉を呈するのが至当であらう。「肉交に  
於て女の最も深い墮落がある、愛に於て女の最高なる昂揚がある。  
女が肉交を欲求して愛を欲求しないことは、女が墮落を欲して高  
められるを欲しないことを意味する。婦人解放の最後の敵は婦人  
である。」

日常的秩序が機能を停止した非常時に現れるのが、(母性)や(処

女性」といった仮構された〈本来性〉の発露に凭れかかるといふ、最悪の本質主義である。ここでいう非常事態とは自然災害に限らず、人為的にもたらされる混乱(革命、反乱、クーデター、テロリズム)や戦争といった、あらゆる〈例外状態〉を指すだろう。

満州事変から国連脱退、戦争へとひた走る情勢のなか、倉田百三は「女性の諸問題」(一九三四、初出未祥)において、「日本は今その内外の地位に一大飛躍を要求されてゐるときであり、国の建てなおしをする画期的時代を産む陣痛状態にあり、女性は「時代を産む母」としての任務を自覚して立ち上らねばならない」と主張、かつて自身が提示した序列(「女性美の種々の段階に就いて」『女性改造』一九三三・七)を引いて、女性美の型を最低位の「継母」から「鬼女」「淫女」「淑女」「貴婦人」「童女」「天女」、最高の「聖母」へと倫理的な階梯として価値付ける。そして、またしてもそこで、あの名が呼び出されるのだ。「ワイニンゲルがいふやうに、女性はどうしても母型か春婦型かにわかれる」以上、女性は是非「聖母にまで高まり、浄まらなければならない」。

これら〈性差の絶対化〉に対して、萩原朔太郎によるヴァイニンゲルの参照の仕方は、その女性観全体の当否はともかく、〈性差の相対化〉の可能性を示している。

ワイニンゲルの説く如く、男女の科学的な性的区別は、決してその単なる見かけや、生殖器の外部的形態にあるのではない。実際

問題としての男女の区別は、もつと遥かに複雑であり、性格の内部に於ける傾向や気質やの、微妙な内奥の実質に存するのである。(…)例へば今我々は、単に或る表象を有するといふ理由を以て、生まれてすぐ「男」として認定された。そして男として名前づけられ、男として教育され、男としては兵役の義務を強制された。

〔虚妄の正義〕第一書房、一九二九

同様に「或る人間が、性格的に充分の男性であり、殆ど女らしき性情を持たないにもかかはらず、単にその肉体の一局部が、女の外観的な特色を有するといふ理由で、生れた時から女として養育され、あらゆる女らしさのしつけ、女らしさのたしなみ、女らしさの行為情操を強制され、しかも社会が否応なく、圧制的に強制させるものとすれば、これが不自然であり、残酷であり、言語道断であるのは勿論だらう」。だから、「すべての「新しい女」が叫ぶところは、誤つた女性の概念から、我々を解放せよと言ふのである」。

通常、性的差異の決定は、生物学的性差(セックス)を根拠として、社会的性差(ジェンダー)が正当化され、それらをもとに自動的に決定された性的欲望(セクシュアリティ)の対象選択が異性愛として強制されるという形をとる。だが、生殖器のような生物学的な指標すら自明ではない以上、正しい性差の概念は何を基準に適用すれば良いのか。そこで、朔太郎は〈新しい女〉が「我々女性は」と言うところを、「否。我々は女性でない」と応じるように呼びかけるのだ。

さらに、〈性差の相対化〉の方向を示す例として、大岡昇平が幼少期を回想する際、その思想を参照する仕方を見てみよう。

血管は細く、アレルギー体質で、風邪を引き易い。血液型はB型、顔貌が女性的でないだけで、いろいろの点でワイニンゲルのWがまさっているといえそうである。従って知恵の目覚めた六歳の頃「女になりたい」ということが独立した願望としてあり、それが父の折檻を機会に発現の機会を捉えたとする方が自然である。

〔幼年〕『別冊潮』『日本の将来』一九七二・一―七二・七  
男のなかには女が存在し、女のなかには男が存在する。すなわち、〈M＋W〉であるなら、全ての男女はその比率によって構成されるグラデーシヨンのどこかに位置するのみである。要するに、両者を明確に分かつ基準など、ない。だとすれば、男性も女性も現にある者とは異なるような何か他の者となる可能性を等しく有していることになるだろう。現在でも、ヴァイニンガーの読み方は、以上のような〈性差の絶対化／相対化〉という二極に分かれている。

戦略的に〈性差の絶対化〉を選ぶスラヴォイ・ジジエクは、女性は存在論的には〈無〉だという主張をラカンのテーゼ「女は存在しない」の先取りだとする(『快楽の転移』)。そして、女性は〈母婦型／娼婦型〉という単に性的な存在であり、男性だけが脱性化された倫理を構築できるとする「ヴァイニンガーが信奉する反フェミニニスト的なイデオロ

ギーの機構」は、「逆説的な、しかし必然的な結果」に至るといふ。「つまり、〈ファルス〉に完全に服従しているのは男であり(〈例外〉を設けることは、〈ファルス〉の普遍的な支配を維持するための手段であるから)、女は、筋の通らない欲望によって、〈ファルス〉を超えた」領域に到達する」。女は単に〈無〉なのではない。(〈ファルス〉＝「である／存在」)を拒否する別の何かなのだ。

逆に〈相対化〉を示すクリステイヌ・ビュシィグリュックスマンは、原文中の「Rhizom」の語から「ヴァイニンガーのいう女性的なものの本質はリゾーム」だと主張してドゥルーズ＆ガタリの思想へと接続する(『パロック的理性と女性原理』杉本紀子訳)。確かに、男女は両性の性質を併せ持つとする前者の〈M＋W〉は、後者による次の一節に等しい。「女性の中には男性と同じほどに多くの男たちが存在し、男性の中にも同様に女性と同じほどに多くの女たちが存在することになり、これらの多くの男たちがこれらの多くの女たちと、またこれら多くの女たちがこれらの多くの男たちと、相互に入り乱れ結びついて、種々に欲望生産の関係に入るといったことが実現することになる。これらの欲望生産の関係は、まさに男女両性の統計学的秩序を動転させるものである」(『アンチ・オイディプス』宇野邦一訳)。同じく「男性的男子と女性的女子との間には女性的男子、同種性欲の男子、半陰半陽、同種性欲の女子、変性男子(男婦)等無限の等差あり」(片山訳)とする発想は、性差を個体の数だけ増殖させる(〈n個の性〉)と同様で、そこから〈女に成ること(生成変化)〉が導かれるだろう。「性愛はあ

まりにも多様な生成変化を結びつける。それはいわばn個の性であり、(…)性愛は、男性をとらえる女性への生成変化と、人間一般をとらえる動物への生成変化を経由する」(『千のプラトール』宇野邦一訳)。

芥川は、『婦人公論』(一九二三・四)のアンケート「私が女に生れたら」で、有島武郎、正宗白鳥、前田河廣一郎、永井荷風、猿之助らと並んで、答えて言う(同様の質問は「若し女に生れたら」(『婦人文芸』一九一五・七、八、回答者は吉井勇・長田幹彦・泉鏡花・岡本綺堂ら)がある)。「若し女に生れたら」、「出来るだけ温良貞淑を装ひ(…)経済的独立などは少しも得たいとは思ひません」。さらに、芥川はヴァイニングガールの語彙を用いて「娼婦型の女人は普に交合を恐れざるのみならず、又実に恬然として個人的威厳を顧みざる天才を具へ」る(『娼婦美と冒険』一九二四・一一、初出未詳)としている。あくまで性役割を固定化する芥川は、篠崎美生子が指摘するように(『ジェンダー』「芥川」と『芥川研究』を問い直す鍵)前出)、炎に焼かれて死に行く異性装の女から自身を語る言葉を奪って沈黙のなかへと打ち捨て(『奉教人の死』『三田文学』一九一八・九)、自身を罵倒する女性読者の将来を「豚のやうに子供を産みつけ」るような、生殖にのみ拘う存在へと囲い込むのであった(『文放故』『婦人公論』一九二四・五)。

谷崎も芥川同様、「蓼喰ふ蟲」(『東京日日』『大阪毎日』一九二八・二二)『二九・六』などで(『母婦型』娼婦型)に分類するように、ヴァイニングガールの女性観を共有しているが、『吉野葛』や『夢の浮橋』といった(『母恋』)の系譜に連なる作品では、それも変調をきたす。

母は実は、大和からすぐ彼の父に嫁いたのでなく、幼少の頃大阪の色町へ売られ、そこから一旦然るべき人の養女になって興入れをしたらしい。(『吉野葛』『中央公論』一九三二・一、二)

その後母は一二歳の時に祇園の某家に養女として身を売られ、一三歳から一六歳まで舞妓をしてゐた。当時の芸名、芸者屋の名等も調べれば分るであらうが、乳母は知らない。(『夢の浮橋』『中央公論』一九五九・一〇)

そこでは、母親は花街にいた過去を持つとされ、(『母婦』娼婦)の分割線も曖昧になってゆくのだ。さらに、その名に直接触れる際には、男女間の差異も定かではなくなる。谷崎は、(『性差の相対化』)を通して、女性蔑視の思想を肯定性へと転調するのである。

ワイニングゲルの説くが如く、世の中に完全なる男子や完全なる女子が存在して居ないとすれば、従つて世間の男女の間に絶対的差別がないとすれば、此の理屈を或る一個人の心理作用にも応用することは出来るであらう。幸吉はどうかすると、自分が全然女のやうな感情に支配される時がある事を発見した。其時の彼は實際女になつて了つて居るのだ。

(『捨てられる迄』『中央公論』一九一四・二)

他なる者を忌避する芥川と、喜んで受け入れるのみならず極端な場合にはそれになってしまう谷崎は、ヴァイニング受容の二つの典型をなしている。しかし、徹底的に純粋性を追及して、男のなかの女、自己の中の他者を完全に抹消しようとすれば、自己もまた消滅してしまふだろう。おそらく、〈性差の絶対化〉の方向性を推し進めた先には、そのような悲劇的な結果が待っているに違いない。終局には竹内仁が戦慄したという「苟くも精神的個人的生命の永生を信ずる以上、肉体的種族的生命の滅亡も何かあらむ」(前出「三元論哲学の殉教者」という苛烈な結論があるからだ。〈性差の絶対化〉は、その袋小路からの逃走線を引く。

「私は故人の晩年に芸術上の問題に就いて故人と不幸見解を異にし、お互ひに雑誌の上で論争めいたことをやつた。が、今にして思へば故人は死を以て自己の立場を固守した訳である」(『芥川全集刊行に際して』『芥川龍之介全集内容見本』岩波書店、一九二七・九)。これは、小説の筋を巡る芥川との論争を回顧した谷崎の言葉だが、両者の資質・命運はすでにヴァイニングの思想の受容と展開に潜在していたのではないだろうか。

#### 四、おわりに——書棚の中のヴァイニング

芥川の死後、赤木桁平は「河童」でヴァイニングの名が挙げられたことを「君と似てゐるのは自殺したといふだけのことで、彼の遺作た

る「性と性格」や、「最後の事物に就て」などは、決して、決して、懐疑家の軟弱な繰言などから生れたものではない」と非難した。「ワイニングルなどを連れて来ないまでも、君の豊富なライブラリーを探すと、欣んで君の手を握るものは、その辺にいくらでもウヨウヨしてゐるのではないか」(池崎忠孝名義『亡友芥川龍之介への告別』天人社、一九三〇)。だが反対に、現在ではわざわざそれを書架から選び出して手をのばす者の方がむしろ少ないのではないだろうか。実際、『性と性格』の最も新しい訳者である竹内章は「今日ではほとんど話題にされず、図書館の中で眠っているのみである」と漏らす(「あとがき」村松書館、一九八〇)。それでも、ヴァイニングの著作は、日露戦後の焼失した丸善の書棚をはじめ、作家たちの蔵書<sup>ライブラリー</sup>を転々としながら、それぞれの時代に揺り起こされるのを待っている。

時は下つて、(一九六八年)前後、新宿は不穏な空気をたたえていた。大島渚監督『新宿泥棒日記』(ATG、一九六九)は、唐十郎主催「状況劇場」の紅テントが建ち(演目は「由比正雪」だ)、駅前交番が投石を受けるなど、当時の様子をとらえているが、ここにヴァイニングが書棚にある風景が留められている。閉店後の無人の紀伊国屋書店内、横山リエがマルキ・ド・サド、ヘンリー・ミラーや吉本隆明など、時代を象徴するような書物を次々と書棚から抜き出しては、床に積み上げてゆく。横尾忠則がそのうちの一冊を取り上げ、読み上げる。「真の男性は、セクシユアルであると同時に、それ以上の何物かであるが、真の女性は、セクシユアリティ以外の何物でもない、オットオ・ワイ

ニンゲル(…)」。一瞬ちらりと画面に表紙が映るこの書物はヴァイニングァー自身のそれではなく、実は澁澤龍彦『エロスの解剖』(桃源社、一九六五)の一節だ。その澁澤は竹内訳『性と性格』出版の際に書評をよせて「独断と偏見」『文芸』一九八〇・一〇)、「一時は大いに流行したものであるが、今日ではほぼ完全に忘れ去られ、独断と偏見にみちた著者は時代おくれの思想家と見なされている」と、訳者同様、やはりその不遇を嘆いてみせた。

しかし、さらに数年後、ニューアカデミズムと呼ばれる知的潮流の中心にいた二六才の若者が取材に応じた際に撮影された彼の書棚には、オスカー・ワイルドについての書物やモーリス・ベジャールの自伝と並んで、その竹内訳『性と性格』が確かに収まっている(「若者たちの神々」『朝日ジャーナル』一九八四・四・二三、「膨大な量の本を読むが蔵書家ではない」とキャプションの付された一枚より)。書物との関わりとは「どの本が自分にシゲナルを発しているかをパッと見分けてピックアップすること」と語るその若者こそ、当時思想書としては異例の数を売り上げた『構造と力』(一九八三)の著者、ドゥルーゾーガタリ思想を(パラノ／スキゾ)と明快に変奏してみせた浅田彰その人であった。

実は、先に〈性差の相対化〉の典型として示したクリスティーン・ピュシレグリュックスマンのヴァイニングァー論が最初に翻訳・紹介されたのも、浅田らの編集する雑誌『G・S・たのしい知識』第二号(一九八五・一一)の特集「POLYSEXUAL―複数の性」所収の「ウィー

ンにおける他者性の形象 女性性とユダヤ性」による(訳者立川健二も竹内訳『性と性格』を参照している)。また、その特集内には、当時未邦訳であったドゥルーゾーガタリの著作の一部が浅田自身によって訳出されてもいる。その一節。「男とは単に、男の部分が統計的に優勢な者であり、女とは単に、女の部分が統計的に優勢な者である」(「トランスセクシュアリティ『アンチ・エディプス』からの三つの断片」浅田十市田良彦訳)。

重要なのは、一定の性であることではなく、多数多様な性―ケージがキノコについて語りドゥルーゾーガタリが一般化しているような *roses* になることだ。男になり、女になり、子供になり、さらには、動物に、植物に、鉱物になる。こうした多様多数な生成変化の線が、だれのうちにもひそんでいる。性においてそのすべてを一挙に肯定し、ありとあらゆる方向に走らせること。それによって性に軽さと速度を与え、既成の類型や役割から逃走させること。これがトランス・セクシュアリティの戦略だ。

(「ゲイ・サイエンス」『現代思想』一九八二・一一)

これら、浅田の言説が、ヴァイニングァー受容における〈性差の相対化〉の方向性と共鳴しているのは見やすいだろう。

そして現在。二〇一一年三月一日、東北地方を中心に巨大な地震が発生し、連動した津波が多くの人命を奪った。それに続いて起こ

た原発事故はいつ収束するとも知れない。このような状況のなか、浅田彰は、かつてと同様の発言を繰り返している。

彼（ウルリッヒ・ベックを指す―引用者）が強調したのは、リスク社会において、資産と所得の再分配を巡る階級闘争に対し、リスクの分配が問題になってくる、その場合、原発事故ともなると影響が社会全体に広がるので、資本家／労働者といった区別を超え、全員がリスクを確率的に分有するほかなくなる、ということです（ちなみに、アイデンティティの問題もこの観点から見直すことが出来るかもしれない。例えば性的志向に関しても、自分は完全にストレートでマジョリティに属すると思っている人が実は自分のなかにレズビアンやゲイの欲望を確率的に分有しているということもあるわけです）。

（浅田彰・磯崎新・いとうせいこう・大澤真幸・岡崎乾二郎・柄谷行人・丸川哲史・山口二郎「シンポジウム 震災・原発と新たな社会運動」『a t プラス』二〇一・九）

性差をはじめとして、あらゆる差異を絶対化・極大化するヴァイニングの世界把握、すなわち、内なる他者性を排除して〈友／敵〉の分割線を強調したうえで、最終戦争による互いの殲滅を目指すという終末的世界観は、冷戦構造に規定された〈核時代の想像力〉と親和的である。しかし、終わりのない日常性のなかに拡散したリスクについ

ては、もはや確率論的にしか語ることが出来ない以上、それを巡る言説は今後、情動の組織化の、そして生権力による統治の焦点となるだろう。かつての非常時にヴァイニングの名とともに最悪の本質主義が語られたことを思い起こせば、現在の非常事態に発せられた浅田の言葉から、同じ書物から引き出せる全く逆の可能性の、遠い微かな反響を聴き取ることが出来るのではないだろうか。

一冊の書物が別の書物と取り結び関係は、分類記号に沿って配架されるようには、必ずしも自明ではない。ある時は、思想内容において共鳴するように、ときには引用されもして、または、うずたかく積み上げられてその影に身を潜めることのできるバリケードのように、あるいは、焼尽の後に一塊の灰となって他の書物と混じり合うようにして。本稿は、ヴァイニングと芥川龍之介、そして谷崎潤一郎の遺した書物の関係性を僅かばかりでも示し得ただろうか。それぞれを我々の書架のどこにこれから収めるべきなのか。それは、いまだに定かではない。

付記 本稿は「国際芥川龍之介学会」（二〇一・二〇・八―一〇、於北京日本学研究センター）での口頭発表を基にしている。貴重な意見を下さった方々に深謝したい。なお、本研究は科学研究費の成果の一部である。